

10月12日(日)サムエル記第一3章2, 3節

**「神のともしびが消される前であり、サムエルは、神の箱が置かれている主の神殿で寝ていた。」
(3節)**

2節の冒頭の「その日」という表現により、神がみこころによって定められた日に、サムエルに対する神の召しのあったことが語られようとしています。2, 3節で気がつかされることは、エリは自分のところで寝ていて、サムエルは神の箱が置かれている主の神殿で寝ていたということです。なぜサムエルが主の神殿で寝ていたのかは分かりませんが、少なくともサムエルが主の御声を聞きやすいところにおいて、主の臨在の近い場所にいたことは間違いありません。そのようなサムエルに対して主の語りかけがありました。私たちは普段どのような場所にいるでしょうか。主の臨在に少しでも近いところにおいて、主の御声を聞こうとしているのでしょうか。それとも、主の臨在から遠く離れたところにいるのでしょうか。

「神のともしびが消される前」に、サムエルに対する主の召しがありました。イスラエルの霊的な危機的状況は、「神のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」「神のともしびが消される前」という表現からも分かります。このような中にあっても、主はあわれみによってサムエルを召して、イスラエルを霊的に建て直し、ご自身のみわぎを成し遂げようとされます。それと同様に、今の時代も主は人を召して、ご自身の働きをさせ、みわぎをなそうとしておられます。すべては主の恵みとあわれみによることをおぼえて主に感謝しましょう。また主の召しを受けて、主の働きのために献身する者たちが起こされるようにも祈りましょう。

10月13日(月)サムエル記第一3章4～7節

「サムエルは、まだ主を知らなかった。まだ主のことばは彼に示されていなかった。」(7節)

4節において「主はサムエルを呼ばれた」と簡潔に神の召しを示されています。サムエルは、「はい。ここにおります。」と答えて、エリの所へと走って行きます。ここからもエリのもとでサムエルがいかに忠実にエリに仕えていたかが分かります。恐らくエリは、サムエルが夢でも見たと思ったのでしょうか。サムエルを再び寝床に帰るように言います。6節で、主はもう一度サムエルを呼ばれます。サムエルは、同じようにエリの所へ行きましたが、エリは呼ばなかったと繰り返し、再び寝床へ帰るように言います。そして、7節をご覧くださいますと、「サムエルは、まだ主を知らなかった。まだ主のことばは彼に示されていなかった。」とあります。サムエルが、主を知らなかったというのは、決して知識として主について何も知らなかったという

ことではありません。むしろ、サムエルは主に仕えてはいましたが、主との親しい交わりの中で主を知ることがなかったということです。また、「主のことばは彼に示されていなかった」というのは、みことばを通して神のみこころを知ることがなかったということです。私たちも、自分では主に仕えていると思っただけでは、実際に主の召しにきちんと応答できなかったり、主の御声を聞くことがなく、それにふさわしく応答できないということはないでしょうか。それは、結局私たちが主との交わりに生きていないということであり、何年信仰生活を送っても、主がどなたなのかよく知らないということになりかねないということです。また、主のことばは私たちに示されているでしょうか。私たちはみことばを通して主のみこころが示され、それに喜んで従っているでしょうか。自分の信仰を今日もう一度確認させていただきましょう。

10月14日(火) サムエル記第一3章8, 9節

「主よ。お話しください。しもべは聞いております。」(9節)

主は、三度目にもサムエルを呼ばれます。サムエルは、これまでと同じように、起きて、エリの所へ行きました。この時にエリは、サムエルが夢を見ているのではなく、主がサムエルを呼んでおられることを悟ります。エリの目はかすんできて、見えなくなっている、(2節) 霊の目は決してかすんではいなかったということなのでしょう。エリは、サムエルにアドバイスを与えますが、「主がおまえを呼ばれたら」と、呼ばれているのは主であることを教えます。続いて、「主よ。お話しください。しもべは聞いております。」と答えるように言います。私たちは、あらためて聞くことの大切さを教えられます。私たちの信仰の基本は、主が話されることを聞くということです。まず、聞くことにおいて大切なことは謙遜さです。私たちは謙遜でなければ決して聞くことはできません。特に、エリはサムエルに「しもべは聞いております。」と言うように指示していますが、まさにしもべとして主の御声を聞く謙遜さが必要です。次に、すべてを置いて主の御前に出るということです。何か他のことに忙しくしていたのでは、私たちは主の御前において聞くことはできないでしょう。このことにおいて思い出されるのが、マルタとマリアの姉妹です。マリアは、「主の足もとに座って、主のことばに聞き入って」いました。(ルカの福音書10章39節) 私たちはマリアのように主の足もとに座らなければ、主のことばを聞くことはできません。三つ目が、聞き方ですが、聞き従う思いをもって聞くということです。主が話されても聞きっぱなしでは意味がありませんし、語られる主は私たちが話したことに応答して、聞き従うことを期待しておられるのです。そのようにして、主は名指しで私たち一人一人を呼び、語ろうとしておられますが、一方で私たちは主の御声を聞こうとしてい

るでしょうか。語られる主の御前に謙遜に、「主よ。お話してください。しもべは聞いております。」と常に進み出ることのできる信仰を持たせていただきたいと思わされます。

10月15日(水) サムエル記第一3章10節

「主が来て、そばに立ち、これまでと同じように、「サムエル、サムエル」と呼ばれた。サムエルは、「お話してください。しもべは聞いております。」と言った。」

これまで、主はサムエルを呼ばれるだけでしたが、ここでは「主が来て、そばに立ち」と、主がサムエルに近づいて来られました。主は、「お話してください。しもべは聞いております。」と、謙遜に主の御前に入る者たちのもとに主の方から来てくださり、そばに立たれるお方なのです。「これまでと同じように、「サムエル、サムエル」と呼ばれた」とありますが、これまでと同じようにとは、4節「主はサムエルを呼ばれた」6節「主はもう一度サムエルを呼ばれた」8節「主は三度目にサムエルを呼ばれた」とありますが、これらの呼ばれたことを指しているのでしょうか。すなわち、主は三回、「サムエル、サムエル」と呼ばれ、サムエルは、それをエリの呼びかけと勘違いしたということです。そして、サムエルはエリに言われたとおりに、「お話してください。しもべは聞いております。」と答えました。ここにも、エリの言われたことを忠実に守るサムエルの姿があります。サムエルは、名を二回呼ばれましたが、アブラハムやモーセも主に二回名前を呼ばれました。名を二回呼ばれることは決して偶然の一致ということではなく、その人の人生において非常に大切なことを告げるために、主は名を二回呼ばれます。主は、常に私たち一人一人に対して、人生における重大なことを告げるために名を二回呼ばれます。私には、そのような経験はありませんと言われる方があるかもしれません。しかし、それは主が名を二回呼ばれなかったのではなく、「お話してください。しもべは聞いております。」との謙遜な思いをもって主のことばを聞こうとしなかっただけということはないでしょうか。そうすることで主の召しに答えるチャンスを逸したということはないでしょうか。主は常に私たちのところに来て、そばに立ち、名を呼んでおられます。

10月16日(木) サムエル記第一3章11節

「見よ、わたしはイスラエルに一つのことをしようとしている。だれでもそれを聞く者は、両耳が鳴る。」

「わたしはイスラエルに一つのことをしようとしている。」とこれから主自らがしようとして

いることをサムエルに告げようとしています。これは、まさに神のみこころをサムエルに示すことを意味しています。そして3章19節や4章1節を見ますと、サムエルが預言者として人々に神のことばを語っていることが分かります。まさに、預言者は、神のことばを受けたなら、それが何であっても、まっすぐに人々に語ることが求められています。その時に、「主は彼とともにおられ、彼のことばを一つも地に落とすことはなかった。」(3章19節) とのみことばどおりに主が守ってくださるのです。

「だれでもそれを聞く者は、両耳が鳴る。」というのは、わざわいに対する恐れを表現しています。つまり、主がこれからイスラエルに対してなそうとしていることは、まさに聞く誰もが恐れをおぼえるようなわざわいだということです。もし私たちが、主からそのようなわざわいが下るようなメッセージを聞いたとしたらいかがでしょう。黙って、聞かなかったことにするでしょうか。ここで大事なことは、主が語られたことは必ず成就するということです。両耳が鳴るようなわざわいが、これから確実に起ります。そのことを知っているなら、私たちは何としてでも、その現実を人々に告げ、人々を悔い改めへと導こうとするはずです。私たちも、みことばにより将来に向けて起ることを主から聞かされている一人一人です。そのことをおぼえつつ、みことばを託された者として、人々にみことばのメッセージを語り続けたいと思わされます。

10月17日(金) サムエル記第一3章12～14節

「だから、わたしはエリの家について誓う。エリの家は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に赦されることはない。」(14節)

11節で「見よ、わたしはイスラエルに一つのことをしようとしている。」と言われましたが、12節では「エリの家についてわたしが語ったことすべてを、初めから終わりまでエリに実行する。」と言い換えられています。それは、エリの家に対するさばきであり、しかも永遠のさばきです。そのことは、エリには2章31～34節において、あらかじめ伝えられています。そのさばきがなされる理由は、「息子たちが自らにのろいを招くようなことをしているのを知りながら、思いとどまらせなかった咎のためだ」と言われています。息子たちは、自分たちが犯した罪について、さばきを受けなければなりません。ここで主ははっきりと、エリについては、思いとどまらせなかった咎があると言われます。私たちの罪には二種類あると言われています。一つは積極的な罪で、意識的にであっても、無意識的にであっても、自分自身が犯す罪です。そして、もう一つが消極的な罪で、しなければならないことをしない罪です。エリの場合であれば

後者で、本来であれば、父親としての権威をもって息子たちの罪を厳しく叱責しながら、罪を思いとどまらせたり、彼らの態度を正したり、罪を認めさせ、悔い改めへと導くべきでしたが、そのことをしなかった咎があるということです。私たちは、自分の犯した罪については、悔い改めることが多いと思いますが、消極的な罪も悔い改めているのでしょうか。主は、消極的な罪についてもなお語ってはおられないのでしょうか。

14節で「エリの家は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に赦されることはない。」とあり、永遠に赦されない罪があるのかと驚かされます。しかし、私たちが心から悔い改めるなら、どんな罪でも赦されます。むしろ、ここで気をつけなければならないことは、エリの家は、いけにえや穀物のささげ物を軽んじていたということです。ですから、贖罪のためにと主が与えてくださった手段を自ら放棄するようなことをするなら、もはやそこには赦しはないということです。そして主は、私たちに対しては、聖なる神の御子イエスキリストの十字架を通しての罪の赦しを与えてくださっています。私たちが、イエス様の十字架を通しての罪の赦しを放棄すれば、もはや罪の赦しは私たちには残されていません。積極的な罪であっても消極的な罪であっても、罪が示されれば、イエス様の十字架を仰ぎ、罪を赦していただきましょう。

10月18日(土) サムエル記第一3章15節

「サムエルは朝まで寝て、それから主の家の扉を開けた。サムエルは、この黙示のことをエリに知らせるのを恐れた。」

サムエルは、神が語られたことをすぐにエリには告げず、朝まで寝て、いつものように主の家の扉を開けました。「サムエルは、この黙示のことをエリに知らせるのを恐れた。」とありますが、二つの理由が考えられます。まず一つが、まさにエリの家に対する永遠のさばきは、聞く者の両耳が鳴るほどに恐ろしいことだったので、サムエルも口にすることをはばかれたのでしょう。そして、もう一つが、エリのもとで主に仕えていたサムエルにとっては、エリを父親のように慕い、そこには人間的な愛情に基づいた深いつながりがあったはずですが、黙示のことをエリに知らせるのを恐れさせたのでしょう。聖書には、さまざまなことが書かれています。その中で時には人が聞きたくないと思うようなさばきであったり、悔い改めを促すようなメッセージも含まれています。その中であっても、なお説教者は、与えられたみことばをまっすぐに語り続けなければなりません。聴衆を恐れて、人々の顔色をうかがったり、それゆえに語るべきことを語らないというようなことがあってはなりません。そのことについては、

説教者自身がまず問われるべきことです。それと同時に、聞く一人ひとりも、説教者が恐れなくまっすぐに語るができるように祈らなければなりません。それと同時に、説教者がみことばから躊躇することなく、まっすぐに語っていると確信したなら、すべての聴衆は、謙遜に語られたみことばに応答すべきです。そのような説教者と聴衆の関係が教会の中で形成されていかなければなりません。